



まずは協力いただいたすべてのの方々に感謝いたします。窪川地区では、郷土歴史家の林一将氏、大正地区では田邊猛氏、さらに各地域の方々、十和地区でも区長さんはじめ、実に多種多様な皆様にご協力いただきました。地域に伝わる逸話や子ども時代のお話をしてくださったり、見所を案内していただいたりと、その全てがありがたく、そして貴重な学びになりました。皆様の協力なくして、この連載を続けることはできなかったことは言うまでもありません。改めて深く御礼申し上げます。

「歴史は未来を歩く杖」これは歴史家の磯田道史氏の言葉である。各地区の成り立ちや、人々の暮らしの変遷を取材、調査、探究を続けてきた約15年は、そのことを改めて確認する日々となった。

今日起きたことの原因は昨日にあり、昨日のことは・・・そのようにして、今日という日は10年前、100年前、1000年前からつながっているし、10年後、100年後、1000年後の未来へとつながっていく。このことは、地球上のいかなる場所・事・人においても違いはない。当然、当地も、あなたも、私もその例外ではない。

未来を創造する時に、現在地を正確に知らねばならないし、現在地を知るためには過去を正しく掴んでおかねばならない。古代の遺跡から学び、中世の戦乱期、江戸時代の安定期を古文書などから学ぶ。幕末の動乱期を経て、近代へ向かう激動と変革の時代を記録資料などから学ぶ。さらに戦前戦中、そして戦後すぐの混乱期を正視し、高度成長期を検証する。

そのようにして歴史のつながりに目を凝らしつつ、都(都市)から遠く離れたこの山間の、谷間の、海沿いの、まさに辺境の地で、人々はどのように生き抜いてきたのかを考察する。人々は何に喜び、何に苦しみ、何に従い、何に耐え、何に抗い、何を学

び、何を希望に生きてきたのであろうか。それらに迫るため、現場に足を運び、時代背景を顧みつつ、人と会い、聞き、語り合い、学ぶ。すると新たな疑問が湧き、また足を運ぶ。その繰り返しのよってこそ、はるか昔からここで生きてきた人々の体温や息づかいを感じることができる。はるか昔の子どもたちの歓声までもが聞こえて来るような時もある。「それらの続きが今なのだ」と「今を見る目」がクリアになる。

私は26年前に神戸から十和村に移住した、いわゆるIターンである。26年の間にはたくさんの「？」つまり「この地はなぜこうなっているのだろうか?」という疑問があったし、今もある。故に、この地を深く知りたいと思い、また、知らねばならないと思い続けてきた。約15年を費やした取材、調査、考察、そして連載は一区切りを迎えたのだが、まだまだ知らないことだらけである。知らねばならないことばかりである。「学んでも学んでもまだまだ足りない。私はまだ何も知らない」と自覚していなければ「わかったつもり」に陥り、学びは止まる。私が最も恐れることである。

これからも、たくさんの人々とともに、この地を、そして、この地を取り巻く社会全体を学ぶ旅を続けていこうと思う。

次号から、休・廃校になった町内の小中学校を回顧する「そこに学校があった」が始まります。  
1校目は、この3月で休校となった昭和小学校です。

## 町のうごき

| (4月30日) | 人      | 口   | 前月比 | 出生       | 死亡 | 転入 | 転出 |
|---------|--------|-----|-----|----------|----|----|----|
| 男       | 7,100  | -13 |     | 男 3      | 19 | 26 | 23 |
| 女       | 7,641  | -8  |     | 女 0      | 14 | 26 | 20 |
| 計       | 14,741 | -21 |     | 計 3      | 33 | 52 | 43 |
| 世帯数     | 7,907  | 3   |     | (4月中の届出) |    |    |    |

窪川地域 10,520人 大正地域 2,031人 十和地域 2,190人